

『沈黙』論議を考える：日本の精神風土との格闘についての一考察

池田， 静香
長崎市遠藤周作文学館

<https://doi.org/10.15017/25422>

出版情報：九大日文．19，pp.107-124，2012-03-31．九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：



『沈黙』 論議を考える

——日本の精神風土との格闘についての一考察——

池田 静香
Ikeda Shizuka

はじめに

母からもらったキリスト教という洋服を自分に合った和服に仕立て直す（合わない洋服）（『新潮』昭和42年12月号）など）ことを創作活動の原点とした作家・遠藤周作は、その最初の到達点を『沈黙』（新潮社 昭和41年3月）によって世に問うた。遠藤はこの作品を「書きがいがあった」（ひとつの小説ができるまで）（『本の窓』昭和53年2月号33頁）と振り返っている。昭和39年春、長崎旅行で偶然目にした踏絵に残されていた黒い足指の痕、それが創作の推進力となったことは有名だ。十六番館（当時）で出合った踏絵のイメージが膨らみ、これを踏まなければさまざまな肉体的・精神的拷問を加えられるとしたら、遠藤自身、どう行動するかという問題意識が芽生え、殉教者ではなくやむなく足をかけた弱者、という自らにより近い感覚に視点を据えた上での執筆だった（『沈黙の声』（『沈黙の声』プレジデント社 平成4年7月）など）。

『沈黙』は、波濤万里渡日し、25年もの間宣教の道を歩んだフェレイラが、「穴吊し」という凄惨な拷問にかけられた末に「南無阿弥陀仏」と言つて棄教。その後沢野忠庵と名乗らされ、

幕府の手先となつて生きた彼の悲劇的な人生と、日本に屈したフェレイラの復讐戦よろしく、殉教覚悟で密入国してくる男（ロドリゴのモデルとなったキャラ）の人生とを対面させてみようと思つて書かれた（ひとつの小説ができるまで）31〜32頁。作中、ロドリゴは信徒たちが拷問に苦しむ呻き声に心を痛め、踏絵に足をかける。そしてロドリゴもまた、フェレイラと同じ道を歩むこととなる。殉教者ではないが故にキリスト教史では殆ど顧みられることのない彼等の人生に、「沈黙の声」を与えることが、『沈黙』執筆の目的でもあった（遠藤周作他『座談会 神の沈黙と人間の証言—遠藤周作『沈黙』の問題をめぐる』（『福音と世界』昭和41年9月号56頁）。このことは、作者を始め先行研究において、繰り返し強調され続けている（近年におけるその最たる論考に山根道公『遠藤周作その人生と『沈黙』の真実』朝文社 平成16年3月）。

作者が自作を概観し、「自分の文学的出発以来の第一期の円環を閉じるもの」（『異邦人の苦悩』（『別冊新評』昭和48年12月号）引用は『遠藤周作文学全集13』新潮社 平成12年5月171頁に拠つた）と位置づける『沈黙』ではあるが、「書き終わつた後、（略）足の黒い指の跡を残して、自分の信念を捨てて行つた男はどうなったか、どういう生き方をしたのだろうか、という宿題」（ひとつの小説ができるまで）32頁）が残されたと述べ、『沈黙』を超えるものを考えたいという気になった（『異邦人の苦悩』178頁）と語っている。『沈黙』に置き換えると、キチジローのその後、ということになる。この問題を『沈黙』以後も追求するなかで、遠藤はかくれ切支丹（遠藤表記）の信仰対象であるマリア観音や納戸神と

出合い、「注、踏絵に黒い足指の痕を残した人々にとつての」日本の宗教、日本人の宗教意識というものについて、考えることもできた（「ひとつの小説ができるまで」33頁）。だからこそ、『沈黙』を「書きがいがあった」と、振り返る。

小稿では、遠藤文学の執筆スタイルである長編を書く前には前奏曲としての短編を書き、長編で書き足りなかった部分を改めて短編に書くと指摘される法則に従い、なるたけ作品そのものに即しながら、『沈黙』の「書きがい」を具体的に提示してみたい。そうすることで立ち上がる地図は、遠藤が生涯かけて取り組んだ「日本人に合ったキリスト教」という難問における作家の軌跡の一端を示すはずであり、発表後に物議を醸したと言われる『沈黙』に対するキリスト教会からの問いかけに、作者が創作を通して応えた思索の跡になると推察する。

「誤解された」という『沈黙』への修辭

『沈黙』が、その挑戦的な問題提起のために、キリスト教会の一部から物議を醸したことは、よく知られているだろう。遠藤没後、妻である遠藤順子が語り手となった『夫・遠藤周作を語る』（文春文庫 平12年9月）によれば、発表直後には所属教会で非難され（48頁）、禁書扱いを受けた（128頁）ようだし、年譜（山根道公編「年譜」（遠藤周作文学全集）新潮社 平12年7月）によれば、イグナチオ教会で公開討論があり糾弾されたことが記されている（353頁）。またこの時の様子は、作者自身が「周作サロン③

女運のよかった私」（『婦人画報』昭59年6月号）や『対談 人生の同伴者』（春秋社 平3年11月）などで触れている。更にはカトリック新聞によると、都内の図書館でも、『沈黙』の作者に問う講演会という名の討論会が開かれたようだ（昭41年6月26日3面）。加えてよく耳にするのが「鹿児島、長崎の学校では禁書」（石内徹「解説（石内徹編『遠藤周作『沈黙』作品論集』クレス出版 平14年6月）³⁵⁹頁）になったという話である。このことについて、長崎新聞のバスターセラー欄に、『死海のほとり』（新潮社 昭48年6月）やぐうたらシリーズ（昭和48年、『女の一生』1部（朝日新聞社 昭57年1月）同2部（朝日新聞社 昭57年3月）が登場する一方、『沈黙』が一度も10位圏内に入らないことを考慮に入れるならば、長崎での禁書扱いはまんざらでもなく、『沈黙』で示された「赦しの神」という視点は、殉教地の数多ある長崎では特に、受け入れられ難かったのだろうと推測される。

決して好意的な反応だけではなかった『沈黙』の反響に対し、作者は自作『沈黙』を語る場を度々設けた（井上洋治×三浦朱門×遠藤周作「座談会 井上神父をかこんで」（批評）昭41年8月号）、座談会「神の沈黙と人間の証言——遠藤周作『沈黙』の問題をめぐって」（福音と世界）昭41年9月号）の他、佐古純一郎はNHKラジオなどを含め「対話する機会が三度も与えられた」という（『沈黙』について）（『世紀』昭41年9月号75頁）。小嶋洋輔が「自らの文学的テーマを流布させるために批評・研究体系も利用していく作家の姿がみえる」（『沈黙』と時代——第二バチカン公会議を視座として——）（『日本近代文学』平14年10月125頁）と指摘する通り、作者の発言は作品の読みを規定し

ていくように働くものだ。こうした読みの流れを形成してきた背景の一つには、遠藤自身が語った文学作品の読みについての以下の言及がある。

こういう論があります。「西欧の文学は、基督教、特にカトリシズムがわからなければ、根本的に理解できない」／その論が正しいか、否かは別として、こう言うことはいえると思います。われわれは基督教的な地盤や伝統のなかで育っていないために、カトリック作家は勿論、時によると非基督教の西欧作家の作品をも、しばしば誤読したり、あるいは、自分流に屈折したりする危険があると言うことです。勿論、文学とは、こう読まねばならぬと言う固定した法則がないのですから、ある作品を自分流に屈折して解釈する方法が間違っていると言うのではない。しかし、その作家が書こうとした意図まで歪げると言うとは、これは別問題であります。（「カトリック作家の問題」（三田文学）昭和22年12月号、引用は『遠藤周作文学全集12』新潮社 平成12年4月18頁に拠った。傍線は池田 以下同）

この文章自体は、戦後まもなく爆発的に流行したフランス文学を日本の読者が読む場合についての忠告であるが、ここで示された「基督教」の予備知識を持たない日本の読者への読書案内は、執筆にあたり、「日本的で（略）基督教的雰囲気はどこにもない」（『私の文学』（『われらの文学10 福永武彦・遠藤周作』講談社 昭和42年1月450頁）風景のなかで、「私がえらんだイメージ、私がえらんだ象徴は果たしてそれらの読者に感覚的にわかってもらえ

るだろうか」（『私の文学』449頁）と苦悩する作家の言葉と相まって、作者の意図を汲んだ読みを最優先することを読み手に促す。

むろん『沈黙』への前奏曲となった短編集『哀歌』（講談社昭和46年3月）のなかで、「大きな（略）病中に心に溜まった」（『周作サロン』③ 194頁）遠藤流キリストの眼差しを、日本の風景に馴染むようにと腐心しながら動物の眼で象徴させた時、評論家にすら動物の眼そのものとしてしか伝わらなかった（『異邦人の苦悩』182頁）時の空しさを思えば、読者へ向けて自作を解説し、自前で読みの方向性を示さざるを得なかった苦しい創作状況が思い浮かぶ。とすれば、遠藤が日本人でありながらキリスト教徒でもある作家としての創作上の苦悩を、執拗に語らざるを得なかったのは、日本におけるキリスト教文学への読みの土壌が熟していないことに起因する、作品が読者とのコミュニケーション不全を起こすのを防ぐための、やむを得ない手段だったのだと考えられる。また一方で、こうした遠藤の創作上の苦悩の横溢に心寄せる読み手にしてみれば、「（注、『沈黙』という）小説のタイトルが誤読を招く原因になった」（『沈黙の声』65頁）という作者の言葉が、まるで我が事のように身につまされるものとして響くのだろうかということも、それなりに理解できる。

だが遠藤は、「今度の『沈黙』では相当布教意識もあつた」（『座談会 神の沈黙と人間の証言』53頁）と明かしている。それほどに『沈黙』は、キリスト教を根幹とする遠藤周作にとって、作家生命を賭けた作品だったはずだし、「布教意識」という信念のもとに自らの考えを『沈黙』で世に問うたのなら、作品が巻き起こ

した物議への責任は、作者自身がよく痛感していたはずだ。とすれば、現在最新版全集における年譜や解題において「踏むがいい」という表現が誤解され」（年譜 353頁）たと記述される『沈黙』とは、ダブル・イメージを使つて描いた動物の眼を理解してもらえなかったというような、日本におけるキリスト教文学の読みが未熟である故の読み落としと、同質の誤解と捉えていいのだろうかという疑問が生じる。そもそも、日本の精神風土とキリスト教の対決を問うた『沈黙』の執筆方法について、遠藤自身、自分が持つている「キリスト教信者であるため」の「発想法」及び「イメージ」を、「今度はもう露骨に出してみようと思つて出した」（座談会 神の沈黙と人間の証言 53〜54頁）と言つてゐる。これは動物の眼を用いたダブル・イメージを使わず、『沈黙』では踏絵のイエスの眼差しをダイレクトに利用して、遠藤流キリストの眼差しを描いたことを指している。その意味において、『沈黙』以前の作品『哀歌』で、日本の日常的な風景のなかに置き換えた表現と『沈黙』とは、その成立経緯を異にする。

先行研究が指摘する通り、『沈黙』で遠藤が「露骨に出した」が故に物議を醸したのは、ロドリゴが絵踏みする場面における「声」、その声の描かれ方であつた（佐藤泰正「遠藤周作——『沈黙』を視座として」（『国文学解釈と教材の研究』昭44年2月号）、武田友寿「『沈黙』論をめぐって」（『遠藤周作の世界』昭46年7月）、佐古純一郎「遠藤周作『沈黙』（『国文学解釈と鑑賞』昭50年4月号）、小坂真理「遠藤周作試論——『沈黙』のなかの声」（『文学・史学』昭54年5月号）など）。そのため、

次に、そうした『沈黙』への批判とその反応がいかなうものであつたのかを提示する。

・『沈黙』への批判と応答

『沈黙』を書いたことで問題となつた最大の点は、絵踏みの場面だ（山根道公「遠藤周作その人生と『沈黙』の真実」307頁。特に神学的な立場からは、踏絵を踏むときに「踏むがよい」（『沈黙』「遠藤周作文学全集」新潮社 平11年6月³¹²頁）という声が聞こえたことと、踏絵を踏んだ後のロドリゴの胸中に「たとえあの人は沈黙していたとしても、私の今日までの人生があの人について語つていた」（³²⁵頁）という新たな確信ともいふべき信念が響いてくるように書かれたことは是非が問われた（そのための応答として遠藤は「カトリック新聞」昭47年1月23日6面に「踏絵」という短いエッセイを寄せている。前年11月に映画『沈黙』が封切られた。この絵踏みの許容という事柄が問題視されるのは、教義的な立場から言えば、絵踏みを許容し弱者の復権を認めてしまつたら、殉教者（強者）の栄光を語る際に矛盾が生じるためだ。『沈黙』の舞台となつた17世紀切支丹迫害下の殉教の勧めを引き合いに、「結論として示されたのではないと（略）考え」ながらも「読者にそう（注）絵踏みの許容として受け取られるのであれば」否定する根拠を示さざるを得ないとするのが片岡弥吉である（『絵踏と文学』（『踏絵——禁教の歴史——』NHKブックス 昭44年6月166〜173頁）。また片岡と同じく聖職者であり、現在『沈黙』論の中でカトリック側

の代表的意見として位置づけられる粕谷甲一も、この点を以下のように論じる。

この著の沈黙という中心テーマについて言いたい。(略) ロドリゴは「踏むがいい」という神の言葉聞いて踏んだのである。いわば、この神の言葉というプラカードこそ、この転びを義とする根拠である。(略) もし(略) ロドリゴが……あのプラカードなしに……意識もうろうたる眼前に苦しむ民の姿を見て、いつさいの裁きをただ主の御旨にゆだねつつ踏み出したなら神の最高のたからいであり、その神の沈黙を聞き得る耳を地上に与えんがために、御言葉^{ゴズ}は人となつて、地上に來たり給うたのである。(略) この書の最も残念な点は、神が「沈黙」を破つた点にある。(「沈黙」について) (世紀 昭41年7月号7頁)

粕谷は「踏むがいい」という声が聞こえたことが棄教を肯定すると指摘し、それが残念だという。そして遠藤が主張するように「日本的ムードを通じて、キリスト教を受け止めた」とすればそれは一歩あやまれば単に転びを肯定するのみならず、すでに賛美する如きことにもなりかねず(略) キリスト教徒の本質的使命の崩壊を生むことになる。(粕谷甲一「沈黙」について 253頁)と、遠藤神学の危うさを訴える。同じく上総英郎が「共感と挫折——「沈黙」について」(「三田文学」昭42年4月号)で痛烈に問うたのは、ロドリゴの絵踏みの動機として、「踏むがいい」という声や、「若し基督がここに居られたら、……たしかに基督は彼らのために転んだらう」というフレイラの

乱暴な予想」(29330頁)が伏線として描かれる点だ。上総は、こうした伏線に添うと、絵踏みの場面で「ひびいてくる声」は「最も清らかと信じたもの」(キリスト)の声であり、「ロドリゴは意志のない状態でただ足を下すにすぎ」ず、踏絵を踏むのは「行為ではな」く「思考力の麻痺に近い」(30頁)と指摘する。

この指摘を考える時には、絵踏みの場面におけるロドリゴの苦悩について、笠井秋生が『沈黙』——父の宗教から母の宗教への転換(『遠藤周作論』双文社出版 昭62年11月)で、そこへ至るまでの過程に「踏みたくないと思つているロドリゴの心理描写を三十枚にわたつて書いている」と遠藤自身が訴えていることを引用しながら「踏絵の前に立つ直前まで、ロドリゴは踏むことを拒否し、殉教を決意していた」(引用は『遠藤周作「沈黙」作品論集』297頁に拠つた)と指摘していることを想起せねばなるまい。

『沈黙』に限らず、遠藤文学において、「踏絵」を踏んだ者の心情は重要なポイントとなる(例えば『海と毒薬』(「文学界」昭32年6、8、10月号)で描かれた生体解剖事件に参加した勝呂なども、現代の踏絵を踏んだ者の心情を描いたもの。特に、遠藤が『沈黙』を「相当布教意識」をもつて書き、日本人の罪意識の不在を問うた『海と毒薬』発表後、「日本人には罪意識がないから、これに對してキリスト教は対立してどうしてもむずかしいというのではなく、ないのではなくあるという方向に持つて」(座談会 神の沈黙と人間の証言 51頁)いこうと考え、その方向性のひとつとして『沈黙』を世に問うたのなら、上総の指摘があの場合のロドリゴへの「声」が有する効果を最大限に作用させて読んだ場合

であつたとしても、踏絵を踏んだ者の内面描写に、「思考力の麻痺」として読まれる可能性を孕んでいることに、注意する必要があるだろう（万一ロドリゴが「思考力の麻痺」から踏絵を踏んだとなれば、『海と毒薬』で「疲れ」から生体解剖事件に参加した勝呂を描いたことと同じになる）。そして「相当」の「布教意識」を持ちながらも、「注、『沈黙』で提示したものが」神学的に言つて正しいか正しくないかということは、自分でもわからない（「座談会 神の沈黙と人間の証言」51頁）と述べているのだから、その是非を問うことが作者の執筆意図を一方的に歪めて読むことにはなるまい（笹淵友一「近代日本文学とキリスト教——主として遠藤周作『沈黙』について」（『国文学解釈と教材の研究』昭42年2月号）や玉置邦雄『「沈黙」の世界——母性的赦しの神への希求』（『日本文芸研究』昭44年12月号）は、『沈黙』は文学作品である、とその評価を避ける）。

『沈黙』について、遠藤自身が、キリスト教会から転びの許容や転びの賛美と批判される所以となる絵踏みの場面を指して、「赦しの神」という言葉を使用したわけではない。しかし遠藤が、この作品をもつて、これまでキリスト教会から見棄てられてきた転び者たちを「転んでもカトリックは見離されません」という形で示そうとし（「座談会 井上神父をかこんで」120頁）、また「僕の作中人物は転んでもキリストについては決して絶望していない。絶望以前の罪はすべて赦される」（「座談会 神の沈黙と人間の証言」59頁）と信じて『沈黙』を書いたのなら、絵踏みの場面をもつて提示された彼の布教意識を（「注、棄教・背教をも包摂する」赦しの神」の提唱と言ひ換えること自体は、執筆者

の執筆意図を枉げて読む（カトリック作家の問題）曲解にはならないだろう。「誤解」と言われる読みが問題となるのは、絵踏みの場面（赦しの神）が転びの賛美へと展開して読まれた場合である。

こうした「誤解」とは、「座談会 井上神父をかこんで」によれば、「転んだほうがカトリック的」（120頁）と読まれたり、「踏んでも踏んだ痛みがあつたろうということが転化して、やがて踏んでもいいということになり、踏んでも平気やという（略）世界にはいった」（124頁）場合のことである。このように、『沈黙』を棄教賛美と捉える読み方について井上洋治や三浦朱門から直に問われた遠藤は、「その世界に入つたらおれの『沈黙』とは全く関係のない世界だ」（124頁）と反論し、「（注、『神の沈黙』ということばかりが強調され）へんな誤解をされ」（120頁）だけれども、自分が言いたかったのは「歴史や教会に沈黙されている人間に再び人生を語らせ、それを通して神が自分の存在を語っているということが（略）いいかつた」（121頁）と主張する。しかしながら『沈黙』では、踏絵という人間における残酷で究極の選択を迫られた場面において、「何故、神は沈黙し給うのか」と嘆き続けるだけでなく、「踏むがいい」と棄教を促す声が、どこからともなく聞こえてくる（粕谷論）から、三浦が懸念する「転んでも平気や」という読みの転化が生じる可能性があり、実際、井上神父のもとには「転んだほうがカトリック的」だと読むような読者がでてきてしまっている。

遠藤が「誤解」だと反駁するこのような読み方について、作

者の真意が伝わり難き遠藤文学を読解するためのキーワード「ダブル・イメージ」（『哀歌』からの展開の結果「沈黙」として、両者の描写の違いを考えてみたい。作中、切支丹迫害下の日本でロドリゴは、自分さえ棄教すれば他の日本人信徒たちが助かるかもしれない状況にある。するとロドリゴが心に思い描くキリストの顔が、西洋的な威厳のある顔からだんだん弱くみずばらしいものに変化していき、最終的には「多くの人に踏まれたために摩滅し、凹んだまま（略）悲しげな眼差しで」（312頁）ロドリゴを見つめる。その眼差しと、どこからともなく聞こえてくる「踏みがいい」（312頁）という声に促されるように、ロドリゴは踏絵に足をかける。ここでロドリゴが棄教したのは、沈黙している神に絶望し、日本人信徒の延命のために棄教したのではない。棄教したロドリゴの心には、西洋的ではないかもしれないが「踏まれるため、この世に生まれた」という形でのいわゆる「私のイエス」が生き続けている。この「私のイエス」によって遠藤が提示したのが、「転んでもカトリックは見離されない」という解釈であり、「歴史や教会に沈黙されている人間に再び人生を語らせ、それを通して神が自分の存在を語っているということ」（『座談会 井上神父をかこんで』）の具体的な提示である。この踏絵のキリストの眼差しは、先に示した通り、これまで『哀歌』で恐る恐る試してきた動物の眼を借りて表現してきたキリストの眼差しを、踏絵のキリストの上に露骨に表現させたものだ。表現方法が異なるだけで、動物の眼差しと踏絵のキリストの眼差しは同質の役割を果たしていることに疑い

い。だが、両者の描写で大きく異なるのは、『哀歌』で試された犬や九官鳥はキリストの代弁者として語ることはない（九官鳥が覚えた言葉は病室の患者の悲哀の呟きである）にも関わらず、『沈黙』の踏絵のキリストは語る（「踏みがいい」）点にある。

また、この「沈黙の声（語るイエス）」の描き方に関し、プロテストント系雑誌で聖職者を含めてやりとりした座談会「神の沈黙と人間の証言」では、「（注、日本人の宗教心について）おおきなところは神学者の人に究明してもらおう」ことにして、小説家として「日本人の感性に向いたものを強調して（略）母性的なものを生かしながら、（注、一神論と汎神論との）へだたりを肯定するような形態がとれないか」を模索し、作品として積み上げたのだと訴える。そして『沈黙』で「結論を出したわけでないし、これから生涯かけて探究して行く」ための「踏み石を置」（64〜65頁）いたのだと付け加える。しかし、「布教といえはおっぱずかしいけれど、（略）キリスト教を知らない読者でも、これを読んでキリスト教にひきずりこんでやろう」（『座談会 神の沈黙と人間の証言』65〜66頁）などという根性も持ち合わせながら、わざと「業の痛さを刺激するような形で踏絵の場面を書」き、

（注、キリスト教における）罪というものが（注、仏教的な）業にすりかえられ」（54頁）るように創ったのなら、発表当時の『沈黙』に対する賛否両論に比べて、現在『沈黙』への修辭が「誤解された」という表現に定着している（最新版全集年譜の他、石内徹編『遠藤周作「沈黙」作品論集』の「解説」など）とはいえ、『沈黙』の世界が、粕谷を代表とする懸念である「キリスト教徒の本質的

使命の崩壊を生む」ように描かれているのかどうか、改めてきちんと見極める努力も必要ではないかと考える。この点について佐藤泰正は次のように説明づける。

氏は『沈黙』の主題を語って、そこにはふたつの沈黙があるという。即ち現実の不条理に対する神の沈黙と、いまひとつ、弱さの故にこころび、汚点として歴史の裡に沈黙せしめられている、その沈黙のなかから彼等と呼ばおこしたかったのだと。恐らく、より強いモチーフは後者にあつたのではないか。転んだが故に教会の歴史から抹殺され、切り棄てられてしまった、その名もなき者の復権こそ、この作をつらぬく作者の昂ぶりではなかったのか。キリストの声は踏んだ後に聞かるべきであつたという、椎名氏の言葉はその通りである。技法的にも、また踏むことの自己義認のあやうさからも、まさしくそうあるべきであつた筈だ。然し私は、その踏み出しの一步の重さに、氏の昂ぶりがあつたと思う。(佐藤泰正「二つの『沈黙』」(『中央公論』昭和42年1月号66頁)

ここで佐藤は、技法的にも神学的にも、あの「声」は踏絵を踏む前に聞かれるべきではなかったと断りつつ、最終的には作家の姿勢を評価する。この作家の姿勢とは、「踏み棄てられたもののへの痛み」(66頁)ということになる。だが、ただ単に強い布教意識を持つだけでなく、キリスト教に興味のない人間をも『沈黙』一篇をもつてキリスト教に引きずり込もうと思つて取り組んだ『沈黙』の評価は、作家の内面における魂の劇に重点をお

いた評価に偏つてよいのだろうか。生前の作家にとつて、禁書扱いを受けるほどの神学的物議を醸した作品を、作者の伴走者のように読んでくれる批評家がいたことは幸福なことであつたろうし、作者が作品に込めた神の信仰への希求をやみくもに否定したいわけではない。だが、発表当時、あれほど神学的に論議された作品を、一般の読者が読み飛ばしてしまった9章以降の部分(切支丹屋敷役人日記)に隠された真実として作者の「思い」を読み取る(山根道公『遠藤周作その人生と『沈黙』の真実』³⁰⁴頁)ことに徹する分析では、作者が置いた「踏み石」(『沈黙』)の位置を測れまい。

とはいえ、キリスト教学を学んだことのない小稿には、遠藤が具体的事例として示したカトリックの日本の変容としての遠藤神学(救しの神)を、神学的立場から判断することは手に余る。しかしながら、作者自身がいろいろな場所で語った執筆意図と、その結果としての『沈黙』の描写を、詳らかに照合し評価することは可能である。もちろん遠藤ははつきりした理論的確信や作品構成上の計算をもつて『沈黙』を書いたわけではない(『人生の同伴者』145〜146頁)。だが、作家自身による『沈黙』語りと『沈黙』の描写を照らし合わせることは、作者が『沈黙』という文学作品で試みた遠藤流宣教がいかなうなものであつたのかを、立体的に浮かび上がらせることになるだろう。

・「救しの神」の必須要件——「後ろめたさ」について

遠藤が「当たり前でしょう」と訴えるところの「転んでもカトリックは見離されません」という真理は、踏絵を踏んだ者の足の痛みや後ろめたさという心情を併せ持つて初めて是とされる（座談会 井上神父をかこんで」124頁。但し、当事者でない者がその心情を詮索したり「一生日陰者でいろ」などということは以てのほかである。

しかし、『沈黙』を転び賛美の物語と読む場合には、この「後ろめたさ」が欠落するために、非難の対象となる。つまり、先に示した通り、粕谷甲一論では「あの声」が「プラカード」となり、上総英郎論では「あの声に促されるままに」踏絵に足をかけたと、読まれる。むろん、そこまでのロドリゴの苦悩を思えば、作中苦しみ抜いた上で、日本の信者を思い、踏み絵に足をかけたことに疑いはない（笠井秋生論）。それでもなお、井上洋治神父のもとに、信者から「転んだ方がカトリック的だ」といった、あらぬ誤解ともとれる読後感が寄せられるとすれば、それは、粕谷が「プラカード」と指摘するあの声が、ロドリゴが踏絵に足をかける前に聞こえ、更には『沈黙』末尾に記された「今日までの人生があの人を語っていた」という一文が、ロドリゴの「後ろめたさ」を凌ぐの勢いをもつて読まれるからであろう。では何故、踏絵を踏む前に「踏むがいい」と聞こえてこなければならなかったのだろうか。

『沈黙』を「書きがいがあった」と振り返る作者の言及（ひとつの小説ができるまで）に、日本人の宗教心理を表したものととして、時代を経るにつれて、仏像の方から手が差し伸べられていく（33頁）という変化に共鳴を示している部分がある。この

共鳴が、絵踏み前に「声」が聞こえてくることに対する遠藤の遠回しな回答であろう。つまり、神の側から進んで助けるという順番にすることが日本人に受け入れられる宗教へとなる要素だと、浄土宗的な部分を取り入れて書いた『沈黙』や（座談会 井上神父を聞い）121頁、それ以後のかくれ切支丹調査（ひとつの小説ができるまで）32く33頁を通して確信したと主張するのだ。

しかし、粕谷が「キリスト教徒の本質的使命の崩壊を生む」と問い、北森が「父なる神」の厳しい審きとは別に、「母なる神」に頼る」のであれば、「せつかく置かれた「踏み石」もある方向へと導くものとなる」（北森嘉蔵「沈黙」の神学——何処への踏み石か」（月刊キリスト）昭42年2月号）18頁と懸念するのは、遠藤が『沈黙』で提示した「日本人にも合ったキリスト教」について、キリスト教がそこで変容（注、「座談会 井上神父を聞い」では「浄土宗」（121頁）、「座談会 神の沈黙と人間の証言」では「浄土真宗」（54頁）と記されている）すべきなのかどうか、という問題である。この疑問を遠藤の意図（後の遠藤による『沈黙』語りの常套句となる「踏み絵を踏む者の足も痛い」というフレーズが象徴的である）に即して言い換えるなら、「菩薩が手を差し伸べるがごとく神が「踏むがよい」と促した時、踏絵を前にした者の心にどれだけの後ろめたさが刻まれるのか」という問題となるだろう。

「赦しの神」という視点は、『沈黙』以後、「母なる神」「同伴者イエス」として展開していく遠藤神学の原点だ。それに対する粕谷の問い——「キリスト教徒の本質的使命」や如何に——について、遠藤が強い布教意識を持つて『沈黙』を書いたのだ

あればあるほど、読みの土壌が熟成していない日本の読者のために、どれだけ注意深く日本的キリスト教を提示したのかという視点から捉え、その評価を導く努力も、一方では必要とされるのではないだろうか（主要な『沈黙』論を年代順に並べ、一冊にまとめた石内徹編『遠藤周作『沈黙』作品論集』を参照すると、こうした問いは、『沈黙』発表から時間が経てば経つほど少なくなっていく）。

江藤淳による『沈黙』評への不思議

さまざまあった『沈黙』論のなかで遠藤が特に喜び、絶賛したのが、江藤淳の評（『背教者の苦悩と悦び』（『朝日新聞』昭和41年4月29日夕）など）である。褒め称える理由はただ一つ、江藤が『沈黙』に母親との関係性を読み取ってくれた点である。

この主題（注、主人公が心に抱いていたイエスの顔の変化）を見抜いてくれたのは、江藤淳氏で、彼がその批評の中で「この踏絵のイエスの顔は、日本の母親の顔である。私は遠藤氏の母親に対する個人的経験については知らないが、しかしここに書かれた踏絵のイエスの顔の中には、遠藤氏と母親との関係が描かれている」ということを書いてくれたとき、私は長い間、自分が母親から着せられた洋服と、どのような戦いをしてきたかということが、この批評家によって見破られたなと思った。（『異邦人の苦悩』^{175頁}）

遠藤にとって、母親との精神的むすびつきが多大な影響を及ぼしたであろうことに異論はない。『沈黙』で、日本の精神風土

に合ったキリスト教を目指し、厳しく裁く父の宗教から優しく許す母の宗教へ（父の宗教・母の宗教——マリア観音について）（『文芸』昭和42年1月号）^{375〜376頁}。このエッセイは『沈黙』が巻き起こした神学的批判への応答と目されている。）の転換の第一歩を図つたにも拘らず、キリスト者からはあつさり「父から母」ではなく「父母的なもの」であるべきだと否定される（北森嘉蔵『沈黙』の神学——何処への踏み石か）^{18頁}。なかで、江藤淳が『沈黙』に日本人の母親像を見出しにくれたことが、有難かつたのだろう。しかし、遠藤が読み換えた江藤淳の評は、次のように記述されている。

踏絵のキリストは、私には、著しく女性化されたキリスト、ほとんど日本の母親のような存在に見える。作者がそれに託してどんなに奥深い個人的体験を語ろうとしているのかは知るよしもないが、それが比較文化論などという言葉だけではいいあらわせぬ深い肉体的な感情なのは確実である。（『背教者の苦悩と悦び』引用は『遠藤周作『沈黙』作品論集』^{27〜28頁}に拠った）

江藤淳は、踏絵に描かれた日本人の母親のようなキリストの顔に「比較文化論などという言葉だけではいいあらわせぬ深い肉体的な」「奥深い個人的体験」があると推察しながら、その中身を追求しようとはしない。だが遠藤はそれを「母親との関係」、もしくは「母親から着せられた洋服（注、キリスト教）と、どのような戦いをしてきたか」という体験と読み換える。まず「母親との関係」と言い換えたことを考えると、江藤淳が「どんなに奥深い個人的体験を語ろうとしているのかは知るよしもな

い」と、その内実には興味を示さない（後の論考『成熟と喪失——母の崩壊』（河出書房新社 昭和42年6月）においても、その内実の探索は行っていない）にも関わらず、作品から作者の原体験（母親との関係）を読みとる精神分析を援用した作品批評を非難してきた遠藤（フランス留学中の日記の他、「父の宗教・母の宗教」370頁）が何故、敢えてそのような批評ともとれる読み換え方をしたのかが疑問だ。更には、『沈黙』で試みたキリスト教の日本の変容を、「キリスト教」という言葉を使わず、遠藤ならではのキーワード（母）を使い、「母親から着せられた洋服」との「戦い」と表現し直し、キリスト教の日本の変容の問題に、積極的に（「原体験としての」母）という表象を加味していく。ここに、『沈黙』以後、「母なる神」を提唱していく遠藤の無意識の誘導を見るのは穿ちすぎかもしれないが、今後の課題として留意したい。

・「聖母マリア」と「納戸神・マリア観音」信仰への理解

昭和33年4月号と昭和34年5月号の「婦人画報」に連載した「聖書のなかの女性たち」が、昭和35年12月に角川書店から単行本化された後、約10年を経て講談社から出版（昭和42年11月）されるにあたり遠藤は、あとがきに『哀歌』や『沈黙』を読まれた読者には、私の母胎が既にこの本にあることに気づかれたと思う」（引用は講談社文庫 昭和47年11月43頁）と記す。本書において遠藤は、新約聖書に登場する女性たちの哀しみや苦しみに、彼女たちのわずかな振る舞いから気づくイエスに尊さを見出

し、また、聖母マリアを私たちの身近な存在へと語り直している（73頁、74頁、77頁）。この聖書の語り直しは、以後、『哀歌』や『沈黙』だけでなく、かくれ切支丹の信仰対象・納戸神が、農家の母親の絵姿を模していることに日本人の宗教心の中心を見出す遠藤神学の、確かな補助線となっていく（笠井秋生『『沈黙』——父の宗教から母の宗教への転換』295～296頁）。そこで、まずは「聖書のなかの女性たち」における聖母マリア信仰の遠藤理解と『沈黙』以後の納戸神・マリア観音信仰についてのそれを、比較検討する。

「聖書のなかの女性たち」において遠藤は、聖母マリアが西欧人の母性の象徴へとなっていくのは「自分に与えられた運命（注、処女懐胎）を（略）はげしい心の動揺と怖れがそこにあった」にせよ「受け入れた」（77頁）ことにその出発点を見出す。

布教するキリストの一行につき従った女性の大部分はみな、過去において人間的な苦悩や哀しみを味わいつくした女性たちだったといえます。（略）聖母マリアもその一人だった。彼女はキリストを生んだ女にはちがいませんが、キリストを生んだからといって彼女には人間的苦悩から逃れられる特権はなかった。いや、むしろ、遂に彼女は誰よりも女性として母親として一番つらい人間的苦悩を与えられたといっていでしょう。／女として一番大きな苦しみの一つは愛する者を失うことです。愛する夫、愛する恋人を失うことです。母親として一番辛い試練は我が子を失うことである。マリアに与えられた苦悩は自分の子であるキ

リストが屈辱と侮辱のなかに十字架上で処刑されるのを直視しなければならぬことでした。キリストの死は今日でこそ栄光ある死ですが、あのゴルゴダの丘の上では犬よりももつとみじめな、恥かしい死だった。そんな息子の死を母親として聖母マリアは凝と耐えねばならなかったのである。／（略）マリアの生涯を見ると、彼女は自分に与えられた運命に決して逆らおうとしなかったように見えます。

（96頁）

姦通が死刑に処せられる時代に処女懐胎したマリアは、キリストの母としての運命を心の葛藤がありながらも受け入れ、肅々と生きた。その母マリアに、人々の苦しみや哀しみに寄り添うことを試みてきたキリストが、人生の最期に自らの人間的な苦しみをはじめて訴え、弟子たちに「これ、汝らの母なり」と啖く（99頁）。この場面をもってマリアは、「キリストの母だけでなく、（略）すべての母親がわが子の苦しみを自分の背に引きうけるように、（略）すべての人間の母になることを要求され」（100頁）、西欧人にとって母性の象徴として捉えられるようになったのだと、遠藤は説明する。

一方、長崎県平戸地方へのかくれ切支丹実地調査を踏まえたエッセイ「日本の沼の中で——かくれ切支丹考」（『野生時代』昭54年1〜6月号）で、かくれ切支丹の聖母マリアへの信仰が生まれた理由について、次のように記す。

聖母マリアはかくれ切支丹たちにとって観念的な存在ではない。なぜなら日本人である彼等は基督教を知る前から、

自分たちの家庭で「母なるもの」をいつも感じていたし、自分を育ててくれた母親を通して母なるものに触れていたから、その母を聖母マリアに投影できたのだ。（略）／負い目、劣等感、そして殉教者たちを裏切っているという屈辱感を抱きつづけるかくれ切支丹たちはその悲しみをうち明ける相手を聖母に求めた。聖母マリアとは彼等にとつてイエスの母だけではなく、彼等弱者すべての母親となつた。彼等は聖母マリアにかつて自分の母親がしてくれたと同じもの——どんな過ちも結局は許してくれ、悲しみを慰めてくれ、共に苦しんでくれたあの母の思い出を求めたのである。／生きながらえるために踏絵を踏む辛さ。その時の足の痛さ。そして殉教する勇氣も強さも持てぬ悲哀。それを聖母マリアは理解してくれる。彼等はそれを願つたのである。（日本の沼の中で）引用は『切支丹時代——殉教と棄教の歴史』小学館ライブラリー 平4年2月206〜209頁に拠つた

遠藤が日本人の宗教意識の中心を見出そうと努めたかくれ切支丹たちが篤く信仰するマリア観音や納戸神に見出されるのは、「どんな過ちも結局は許してくれ、悲しみを慰めてくれ、共に苦しんでくれたあの母の思い出」にある。だが、先に示したように、聖母マリアが母性の象徴となるには、イエスの母という運命に従いぬかなかで育まれた「聖性」が必要とされていた。つまり、遠藤はかくれ切支丹の信仰に関して母子関係は語つても、新約聖書における聖母マリアが見せたイエスの母となることによる苦しみ・哀しみの全てを受け入れる尊き行為によつて

「人間的なものから、人間をこえるものに高ま」(『聖書のなかの女性たち』97頁)る「聖性」については語っていない。キリスト教の根幹となる「聖性(靈性)」が見いだせないなかでなお、かくれ切支丹における「母の宗教(納戸神・マリア観音信仰)」を強調するのは、遠藤が切支丹時代の宣教師たちが伝えた教えは、新約聖書に含まれる母の宗教の側面ではなく、旧約聖書の厳しく裁く父の宗教だったために、転び者たちが優しく許してくれる対象(聖母マリア)を見出し、縋らざるを得なかったと推測する(208頁)ためだ(このことは、本格的なかくれ切支丹調査に入る以前、「座談会 井上神父を囲くこんで」(126〜128頁)や「座談会 神の沈黙と人間の証言」(63〜65頁)などでも強調している)。しかしながら、キリスト教を「父母的なものとした」(『父の宗教・母の宗教』377頁)新約聖書の世界から、更に日本化した具体的様相としてかくれ切支丹の信仰を把握するとき、聖母マリア信仰の成立要件としてある「聖性」が欠如し、遠藤自身、「基督教ではないことははっきり理解できる」(『日本の沼の中で』146頁)と断言するかくれ切支丹のマリアへの思慕に、キリスト教の名残りを認めることができるのだろうか。遠藤はこの疑問に答えるため、かくれ切支丹を浄土真宗と比較する。そして、かくれ切支丹の信仰におけるキリスト教信仰へのよすがを、祈る者の「裏切りの意識」と「後悔と許しの信仰」に見出し(『日本の沼のなかで』203〜204頁)、そこにキリスト教としての最後の抛り所を求めた。

・「後ろめたさ」の行方と『沈黙』

遠藤による聖母マリア信仰・マリア観音(納戸神)信仰の生理解を踏まえ、改めて絵踏みの場面のロドリゴの「後ろめたさ」の描写について、捉え直してみたい。絵踏みの場面の描写はこうである。

「お前は今まで誰もしなかった最も大きな愛の行為をやるのだから……」ふたたびフェレイラは先程と同じ言葉を司祭の耳もとに甘く囁いた。「教会の聖職者たちはお前を裁くだろう。わしを裁いたようにお前は彼等から追われるだろう。だが教会よりも、布教よりも、もっと大きなものがある。お前が今やろうとするのは……」／踏絵は今、彼の足もとにあつた。(略)／黎明のほのかな光。光はむぎ出しになった司祭の鶏のような首と鎖骨の浮いた肩にさした。司祭は両手で踏絵をもちあげ、顔に近づけた。人々の多くの足に踏まれたその顔に自分の顔をおしあてたかった。踏絵のなかのあの人は多くの人間に踏まれたために磨滅し、凹んだまま司祭を悲しげな眼差しで見つめている。その眼からはまさにひとしずく涙がこぼれそうだった。／「ああ」と司祭は震えた。「痛い」／「ほんの形だけのことだ。形などどうでもいいことではないか」通辞は興奮し、せいていた。「形だけ踏めばよいことだ」／司祭は足をあげた。足に鈍い重い痛みを感じた。それは形だけのことではなかった。自分は今、自分の生涯の中で最も美しいと思つてきたものの、最も聖らかと信じたものの、最も人間の理想と夢に

みたされたものを踏む。この足の痛み。その時、踏むがいいと銅版のあの人は司祭にむかつて言った。踏むがいい。

お前の足の痛さをこの私が一番よく知っている。踏むがいい。私はお前たちに踏まれるため、この世に生れ、お前たちの痛さを分つため十字架を背負つたのだ。／こうして司祭が踏絵に足をかけた時、朝が来た。鶏が遠くで鳴いていた。³¹²頁

この後に、いわゆる「切支丹屋敷役人日記」と呼ばれる部分が続き、ロドリゴが心の中では信仰を棄てず、後悔の念に苛まれながらその後の人生を生きたことが描かれているのは了解している。また遠藤が、『沈黙』発表当時、批評家がこの部分を読んでくれなかったと嘆いた（遠藤周作×三好行雄「文学——弱者の論理」（国文学解釈と教材の研究）昭48年2月号）22頁）ことも承知している。にも関わらずこの部分だけを引用したのは、『沈黙』において提示した「赦しの神」以後、かくれ切支丹調査を経て発展した遠藤神学・「哀しみの聖母」（母なるもの）「新潮」昭44年1月号）との考察において、後者には「声」が全く描かれないことがわかるからである。『沈黙』においては、棄教後のロドリゴについて書かれた部分（切支丹屋敷役人日記）も、「声」が雄弁に「あの人（イエス）」を物語る。そうであれば、「赦しの神」と「哀しみの聖母」の比較考察には、最初に「声」が響くこの場面のみに十分だと考えるのである。

短編「母なるもの」で、主人公の「私」は、長崎のかくれ切支丹に納戸神を見せてもらう。するとそこに描かれた農婦の顔

が、主人公の母の思い出に溶け合い、「哀しみの聖母」像となる。この場面は、次のように創られる。

私はその不器用な手で描かれた母親の顔（注、納戸神）からしばし、眼を離すことができなかった。彼等（注、かくれ切支丹）はこの母の絵にむかつて、節くれたった手を合わせ、許しのオラショを祈つたのだ。彼等もまた、この私と同じ思いだったかという感慨が胸にこみあげてきた。昔、宣教師たちは父なる神の教えをもつて波濤万里、この国にやってきたが、その父なる神の教えも、宣教師たちが追い払われ、教会が毀されたあと、長い歲月の間に日本のかくれたちのなかでいつか身につかぬものを棄てさりもつとも日本の宗教の本質的なものである、母への思慕に変つてしまったのだ。私はその時、自分の母のことを考え、母はまた私のそばに灰色の翳のように立っていた。ヴァイオリンを弾いている姿でもなく、ロザリオをくついている姿でもなく、両手を前に合わせ、少し哀しげな眼をして私をみつめながら立っていた。（母なるもの）『遠藤周作文学全集8』平11年12月55頁

『沈黙』の絵踏みの場面における「赦しの神」の描写との比較において考えると、その違いは「声」にあることがわかるだろう。「哀しみの聖母」は、「母への思慕」の変形として存在し、「私（注、祈る者）」のそばに（略）みつめながら立っているだけの幻影として創られている。更には、引用部分に至るまでの間、短編「母なるもの」において語られる「母の思い出」は、

音楽家として一つの音を探し続けるため「ヴァイオリンを弾いている」烈しい女であり、また父に棄てられた哀しみを信仰に向け一心に「ロザリオをくつている」女の姿である。加えて、ここに提示される母の思い出は、決して優しく許してくれるような存在ではない。自分の信じた道（音楽・信仰）に厳しく生きた母に対し、不甲斐無い自分の生を思う時、短編「母なるもの」では、それが迫害下に棄教した裏切り者の子孫であるかくれ切支丹の納戸神信仰と相まって、「哀しみの聖母」の眼差しへと変容していく。後悔しているからこそ優しく許して欲しいと願う主人公の願いは、決して優しく許してくれただけではない母との思い出とのコントラストによって、創られている（母の思い出を主人公の夢で表現させ『精神分析など詳しくない私にはこうした夢がいったい、なにを意味するのかわからない』（36頁）と創る部分などに、先述した江藤淳の評との関連をみる）。つまり、「哀しみの聖母」像は、『沈黙』以後の本格的なかくれ切支丹調査によって把握した「後悔と許しの信仰」を、余すことなく物語に組み込んで創ったといえるだろう。

それに対し『沈黙』である。先の引用における踏絵のキリストも、祈る者（ロドリゴ）に対して悲しげな眼差しを向けていた。だがそれと同時に「踏むがいい。お前の足の痛さをこの私が一番よく知っている。踏むがいい。私はお前たちに踏まれるため、この世に生れ、お前たちの痛さを分つため十字架を背負ったのだ」と呼びかける。それだけではなく、日本の信徒のために棄教することは「今まで誰もしなかった最も大きな愛の行為」（312

頁）だという大義名分まで与えるかのように描写されていた。祈る者の「後ろめたさ」を必要以上に和らげる可能性のあるこの「声」の描写に、「哀しみの聖母」像との大きな違いがある。

『沈黙』が第二回谷崎潤一郎賞（昭和41年）を受賞した時の選評において、三島由紀夫は「遠藤氏の最高傑作」としつつも「末尾の「あの人は沈黙していたのではなかった」という主題の転換には、なお疑問が残る」といい、「神の沈黙を沈黙のまま描いて突っ放すのが文学ではないのか？ それへの怨みと慨きだけで筆を措くのが、文学の守るべき限界ではないのか」（『中央公論』昭和41年11月号、引用は『遠藤周作「沈黙」作品論集』63頁に拠った）との見解を示した。また亀井勝一郎も『沈黙』初版本付録に掲載された「感想」で、「最後まで基督をして沈黙せしめよ（ロドリゴの発言を封ぜよということだ。）と私は言いたい」（引用は『遠藤周作「沈黙」作品論集』7頁）と願った。どちらもとても短い評であるし、彼らの発言の真意までは計りかねるものの、これまで見てきたように祈る者の「後ろめたさ」を必要条件とする「赦しの神」を描くのなら、神の沈黙に耐えてこそ、より一層ロドリゴの「後ろめたさ」が際立ち、この後悔の念がロドリゴへの恩寵（「踏むがいい」）に繋がると読まれたのではないかと考える。むしろロドリゴが、殉教覚悟で日本に密入国した宣教師であることを考えれば、「今まで誰もしなかった最も大きな愛の行為」や「踏むがいい」という声が、一見「プラカード」（相谷甲二）のように見えようと、求道を志したロドリゴにとって、それらの言葉があっても、転んだ自分に想像を絶する後

悔の念が生じたと捉えるのが素直な読み方だとも思う。しかし、読み手の土壌が熟成していない読者のためにどれだけ注意深く日本的キリスト教が提唱されたのかという視点から考えた時、ただむやみやたらに赦す（浄土（真）宗）のではなく、後ろめたさが募り続ける者（棄教者）に神の愛（赦しの神）が降り注ぐ日本的キリスト教を提示しようとしたのなら、「声」を絵踏み前、もしくは同時に響かせたというのは、表現として妥当だったのだろうか。たとえ遠藤が、「（注）基督の声を封じること」は「作品」の中止をすすめるような結果になる」（亀井勝一郎「感想」7頁）と訴えたにせよ、この点は、その後遠藤神学の流れ（「赦しの神」から「哀しみの聖母」へ）のなかに『沈黙』を置いて眺めてなお、疑問として残るのではないだろうか。

これまで確認してきたように、『沈黙』の踏絵のキリストは眼差すだけでなく語っていた。しかし『沈黙』の前奏曲である『哀歌』に登場する動物たちや、『沈黙』から展開された短編「母なるもの」における哀しみの聖母は、苦しむ者・祈る者の哀しみに寄り添う眼差しをむけるのみであった。「声」の描写に関するこの揺れ動き（『哀歌』でダブルイメージ（動物の眼）を使ってキリストの眼差しを表現したが読み落とされる。↓『沈黙』ではもっとダイレクトに書くかと思いき、踏絵のキリストの眼差しをそのまま使う。更に念を入れて踏絵のイエスに語らせたところがそのために転び賛美と読まれた↓短編「母なるもの」では哀しみ聖母像にその眼差しを託す表現に戻した）が生じた原因を、『沈黙』で読み取ってもらえなかったがために転び賛美と「誤解」された、祈る者の「後ろめたさ」という

心情に注意したためなのではないかと推察する。残念ながら断定するには根拠に乏しいが、今後遠藤作品における「信仰」について考察を深めるにあたって、注意していくべき表現の変化ではないだろうか。

終わりに

『沈黙』を傑作だとしつつも、踏絵の場面における声の描き方に疑問を呈する論者に佐古純一郎がいる。プロテストantであり、佐藤泰正と同じく遠藤文学のよき理解者でもある彼は次のような希望を示した。

こんな勝手なことをいつてもいたしかたないが、私の信仰的リアリズムからの願いをのべると、ここで「踏むがいい」とイエスにいわせないで、内に苦しみもだえながら、ロドリゴ神父に踏絵を踏ませてほしいのである。「足の痛み」ということなら、そのほうがよほど痛みははげしいだろうから。つまり、イエスの顔を踏むという行為の中では、やはり神に沈黙を破ってほしくないのである。あのロドリゴに対するイエスのことばは、踏んでしまったロドリゴの「足の痛み」に向かつて投げ掛けてほしかったのである。「その足の痛みだけでいいのだ。私はおまえの痛みと苦しみをわかちあう。ロドリゴよ、私から離れてはならぬ。……。」とそんなふうに「愛のまなざし」を注ぐかたちで沈黙を破ってほしかったのである……。 （佐古純一郎『沈黙』について）

〔世紀〕 昭41年9月号78頁)

ロドリゴの「足の痛み」、つまり「後ろめたさ」をより際立たせるためにも、あの声が聞こえてくるのは踏んだ後がよかったという。このことを椎名麟三は「文学的な技術的な表現の問題」として「踏んでから(略)いいよ踏んでよかったんだよ」と「聞こえてほしい」(久山康×椎名麟三他「沈黙について」(兄弟) 昭41年10月号)17頁)と望んだ。こうした希望的異論は、遠藤がこの場面をもつて強調したキリスト教における恩寵理解の差異から発せられる。また「座談会 井上神父をかこんで」で三浦朱門は、従来踏絵を踏むことについて安易に否定しかしてこなかったキリスト教会に対して、遠藤が「大へん微妙な人間的問題」(125頁)を扱い、「踏んでもいい」という見解を示したことは評価しつつ、絵踏み場面の描かれ方が「根本的なカトリシズムから離れないか」(122頁)を問う。それに対し作者の明確な答えは示されず、「危険をはらんでいることはたしかだ」けれど、「爆弾をはらんでいない文学なんてあるものか」(125頁)と踏み石であることが主張される。

しかしながら、短編「母なるもの」で哀しみの聖母像を、更には『侍』(新潮社 昭55年4月)で同伴者イエス像を確立した後に行われた佐藤泰正との対談において「神学的にみたらあすこ(注、『沈黙』の絵踏みの場面)の是非が問われるところでしょうけれども、小説的に言ってあすこが、後になってあの声が聞こえたとしたならば、小説的にはマイナスになるようにおもいます。」「(『人生の同伴者』146頁)と、表現の問題についてのみ答えた

ことは、「遠藤神学(遠藤作得品における信仰の問題)」を「キリスト教の本質からの距離」という点から考える時、興味深い。今後の課題となるが、この発言にまつわる吉本隆明の遠藤文学における文体解釈を紹介して、小稿を終えたい。

作者の〈信〉の構造にけちをつける所存は毛頭ないが、わたしは『沈黙』も『侍』もかなりの度合で通俗的な作品であるとおもう。そしてこの通俗性は、作者の聖書理解、しいていえばイエス理解にかかっているようにみえる。もしイエスが、この作者が『侍』や「授賞式の夜」に描いているように、人間が心情と現実の窮地にたつたときに影が添うように内面に添ってくれる存在にすぎないならば、それは老いた翁や嫗が信ずる仏菩薩であつても、若者が抱く母親や恋人の面影であつても、ようするに支柱となる幻影であればなんでもいいことになる。もちろん窮地、苦境、危機における内面の支柱という概念は、近代以降におけるすべての宗教的あるいは唯物的〈信〉における普遍的な心情の基盤にちがいない。(略)近代以降における〈信〉のパターンを意味する以外のものではない。(『空虚としての主題』

福武書店 昭和57年4月163頁)

繰り返しになるが、キリスト教に興味をもっていない人にもわかる「日本人に合ったキリスト教」を具体的に小説化することが遠藤の執筆基盤であった。その最初の到達点が『沈黙』である。その上梓後、物議を醸し、問われたのは、小稿で確認してきた通り、『沈黙』が示したもの(『沈黙の声』)がキリスト教の

本質から離れていないかどうかであった。だが、「キリストに
対する信頼（略）を崩していないからこそ、大胆な試みをした」

（『座談会 神の沈黙と人間の証言』65頁）と反駁する作家が描いた
イエス像（踏絵のキリストの眼差しと「踏むがよい」の声）を考察する
現在、吉本隆明のこの指摘が引き合いに出されることは、ほと
んどない。しかしながら、絵踏みの場面の表現について「小説
的に言つてあすこが、後になってあの声が聞こえたとしたなら
ば、小説的にはマイナスになるようにおもいます」（『人生の同伴
者』）と遠藤が明言するのは、あの「声」が「人間が心情と現
実の窮地にたつたときに影が添うように内面に添ってくれる存
在」（吉本隆明）として創られるからに他ならない。作品全体の
文体が、口ドリゴの心情にのみ貼り付いているのだから、小説

の高揚感は口ドリゴの内面描写によって左右される。とすれば、
「踏むがいい」という声が踏絵に足をかけると同時に響いてき
た方が、情情的に盛り上がるだろう。だがこうした作品の文体
自体が、「涙の向うに御仏の顔を思い浮べる」（三浦朱門「座談会
井上神父をかこんで」121頁）日本人の感性を揺さぶりはするもの
の、ともすれば「涙の向こうに血潮を見る」（三浦121頁）キリス
ト教の本旨を置き忘れてしまつてはいないか。

『沈黙』が提示した問題提起（赦しの神）は、発表直後に巻
き起こったこうした問いとの不断の思索のなかにあることで、
より深みを増すのではないかと考える。

（長崎市遠藤周作文学館）